

1950：相馬雪香「日本は生まれ変わることができる」

「心の和解を目の当たりにし、経験した」

1950年、64人の日本の代表団がコーに到着したとき、会議場の外には日本の国旗がなびいていて、日本語のコーラスで歓迎されました。感動的な瞬間でした。まだアメリカの占領下にあった日本では、国旗を掲げることが禁じられていました。

代表団には7人の県知事、多数の国会議員、広島と長崎を含む4市の市長が含まれていました。女性は10人でしたが、そのうちの一人が相馬雪香でした。

雪香は、日本の議会制民主主義の父として尊敬されている尾崎行雄の娘です。尾崎幸雄は63年間国会議員を務めましたが、第二次世界大戦中には戦争反対を主張したため投獄されました。第二次世界大戦前の数年間は、リベラルな考え方を圧殺するような法律が制定され、雪香にとっては「窒息しそうな生活」でした。この時期に彼女が出会った MRA の思想は、「周りが堅い壁で囲まれているときに、天から吹いてくる爽やかな風のようなもの」でした。

雪香は、イタリア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカを歴訪した日本の代表団の通訳を務めました。行く先々で、浜井信三・広島市長は要人たちに広島市からの贈り物として、広島市創設時に植えられた楠の幹から作られ小さな十字架を贈りました。楠の外側は原爆の爆風で破壊されましたが、幹の中心部は残っていました。

広島への原爆投下5周年の日、日本の代表団はカリフォルニア州にいました。CBS ラジオのインタビューで、雪香は彼らが参加したコー会議のことを「世界の様々な問題に対する確かな癒しをもたらすために答えを見いだす会議で、それを拡散させる必要がある」と表現しました。「異なる人種や階級、見解の違いを乗り越えた家族のような国々... 私たちは心の和解を目の当りにし、経験しました」「私たちはこの新しい精神によって日本が生まれ変わることができる」と確信しました。

浜井も放送の中で、自分の街に起こった「悪夢」について語りました。彼はコーで聞いた『平和とは人々が変わることです』という言葉引用し、「私は広島からこの努力を始めるつもりです」と宣言しました。「生き残った市民に残された一つの夢と希望は、広島を平和のモデルとして再興することです」。

1952年、広島で原爆死没者慰霊碑の除幕式が行われました。慰霊碑には「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」と刻まれています。コーから帰国した浜井は、アメリカを非難する碑文を求める人々の猛反対を押し切って、この文言を養護しました。

雪香は、日本が近隣諸国との関係を再構築することに余生を捧げました。1979年、彼女は東南アジアの難民を支援するために、日本人全員にひとり1円の寄付を呼びかけました。それから3ヶ月も経たないうちに1億2千万円が集まりました。雪香が設立した団体は後に「難民を助ける会」となり、人道的支援と地雷除去の支援を行っています。雪香は2008年に亡くなるまでその会の会長を務めました。

メアリー・リン



Yukika Soma



Mayors of Hiroshima(left) and Nagasaki in Caux



An old giant 400 year old camphor-tree stood in a corner of the precinct of a temple called "kokutaiji" where the remains of the feudal lords of Hiroshima are entombed. This cross was made of the tree after it died in the blast of the atomic bomb on August 6, 1945.

